

ジャパンボウル®  
第一部 その始まりと発展



(Japan Bowl の名称とロゴは、ワシントン DC 日米協会の登録商標です)

ジョン・R・マロット

毎年、ワシントン D.C. で開催される全米ジャパンボウル大会の優勝チームには、日本への旅行が与えられる。ここ数年では、安倍首相が 2013 年に開始した日本と米国の学生交流を推進する「カケハシ・プロジェクト」により、150 名をこえるジャパンボウルの優勝者及び上位入賞者が訪日することが出来た。アメリカ国内で日本語を学習するトップレベルの高校生である成績優秀者にとっては、ずっと勉強してきた日本語が話されている国である日本を見るのはほとんど初めてである。

最近では日本人の多くはジャパンボウルに関して聞いたり、ジャパンボウルで日本を訪問した学生にも会っているが、ジャパンボウルについては漠然としか理解していない。

### ジャパンボウルとは？

一言でいえば、ジャパンボウルとは日本語を学習している高校生のためのトップレベルの学術大会である。ワシントン DC 日米協会により 1992 年に設立され、日本語能力のみならず、日本文化、日常生活、歴史や地理等の幅広い分野について競う大会である。

出場者は日本語のみならず、日本に関する広い知識が求められることがジャパンボウルを非常にユニークな大会している。言語以外の日本関連の問題は第 1 回大会から出題されている。その理由は、日本は日本語が話されている世界で唯一の国だからである。これに対して、英語、仏語、西語、中国語等が多くの国々で話されていることと異なる。すなわち、学生が日本語を選択することは、同時に日本という国を選択することになる。日米協会は、学生がジャパンボウルへの出場を目指して日本語を勉強することが、

学習している言語が話されている国についてさらに理解を深めることに繋がることを期待している。

ジャパンボウルには、「豊かな言語」と呼ばれているカテゴリーに分類されている日本語のユニークな側面も含んでいる。日本人が使うことわざや四字熟語、楽しい反復言葉である重ね言葉や擬態語、擬音語等の特別な表現法がある。ジャパンボウルでは、一般的な挨拶表現も含まれるため、学生は時に応じた適切な挨拶表現の使い方と挨拶の返し方について学習する必要もある。これらの熟語や慣用句は通常は学校のクラスでは教えることはなく、教科書にも記載されていない。豊かな言語のカテゴリーは、日本の手ぶりについての質問を含む。「ボディランゲージ」もコミュニケーションの手段の一つだからである。

言語以外のトピックがジャパンボウルの質問に含まれているのと同様に、この特別な言語の豊かさのカテゴリーがジャパンボウルをユニークなものにしている。

### ジャパンボウルの名称

「ジャパンボウル」という名称はしばしば混乱を招く。

「ボウル」という言葉は、米国内の大学間の年末のアメリカンフットボールの決勝試合を意味する言葉として長年使われてきている。（「ボウル」という単語が使われている理由は、フットボールスタジアムのほとんどが楕円形であるため。）

日本では、「ジャパンボウル」という名称は、オールスターアメリカンフットボールの試合に使われていた。

アメリカでは、「ボウル」という名称が学術大会で多用されはじめたのは1950年代からである。トーマス・エジソンが設立した有名なアメリカ企業のゼネラル・エレクトリック社（GE）が、テレビ放映された大学チームによる学術コンテストのスポンサー企業になったことに端を発する。これは「GEカレッジボウル」と呼ばれ、学校間チーム同士の大会を意味した。これが「ジャパンボウル」の名称の由来である。

### ジャパンボウルの発案者

ジャパンボウルはどのように始まったのか？それは、ジーン・モーデンという卓越した女性が発案した。モーデン女史をワシントンDCの日本語教師とだけ記述することは簡単であるが、事実はずっと複雑で興味深い。

第二次世界大戦勃発時、モーデン先生はカリフォルニアのスタンフォード大学のフランス語専攻の学生であった。太平洋戦線で日本と戦っていた米海軍は日本語の流暢な人間がのどから手が出るほど必要であった。仏語の成績が優れていたため、彼女は日本語も学習できるだろうと海軍は推測したが、言語は全く異なるものであった。

大学卒業後、モーデン氏は米海軍に仕官として入隊し、コロラドの特別学校で日本語を勉強し、首席で卒業した。その後、米海軍情報局で傍受した日本語の無線内容を翻訳する業務についた。終戦後は、日本に派遣された最初の女性仕官となり、マッカーサー將軍の部下として連合軍占領下の日本で通訳業務に従事した。

任務終了後、モーデン先生は帰国し、高校の仏語の教師となったが、日本への愛着と関心は途切れることなく、1955年に日本語及び日本文学で修士号を取得した。1974年にはメリーランド州（ワシントンDCの隣接州）モンゴメリー郡の教育委員会を説得し、高校での日本語プログラムを開始した。当時は、日本語授業はほとんどの場合大学レベルで行われており、非常に稀なことであった。

モーデン先生はウォルト・ホイットマン高校で何年間も日本語を教えたが、同校の存在は、ワシントンDCで勤務しモンゴメリー郡に居住する日本の外交官やビジネスマンの間で広く知られることとなった。1987年には、皇太子ご夫妻がモーデン先生のクラスを見学した。

モーデン先生の功績をたたえ、2004年に天皇陛下より宝冠章が授与された。モーデン先生は、2010年に86歳で死去し、アーリントン国立墓地の米海軍士官であった夫の隣で永遠の眠りについた。

## 第1回ジャパングボウル

モーデン先生は、仏語と比較して、日本語はアメリカ人にとって学習が難しい言語であることを知っていた。モーデン先生は、日本語を選択し学習を続けている生徒が楽しく学べる方法を模索した。

モーデン先生は大会を開催しようと考えた。教師経験から、テスト形式では生徒は全く楽しめないということを知っていた。大会は大変な試練であるからこそ、学生が楽しく参加できるものにしたかった。出場者に暗記を強いるスピーチコンテストのような形式

は絶対に避けたかった。学生には大会の質問内容は事前には知らせないため、相当な事前準備と勉強が必要であった。

新規の大会開催にはまだ重要な条件があった。それは、日本語だけの質問に終始しないことであった。学生は語学教科書の範囲をこえて、日本の文化、歴史、地理と社会について学習する必要がある。仏語教師として、モーデン先生は仏語が世界中で話されていることはよく知っている。実際、29か国において仏語は公用語である。他方、日本語は唯一日本国内でのみ話されているため、学生は日本語だけではなく、日本について学び、知識を養うことが理にかなっている、とモーデン先生は考えた。

さらに、モーデン先生は、ワシントンDCで人気のテレビ番組「イツアカデミック」を見本にして作った企画案にたどり着いた。その番組は、高校生チームがクイズ形式で競うものであった。それは、毎週、3つの高校が学業に関連したトピックの質問にテレビのライブ番組で回答するものである。司会者は口頭で質問し、出場者は制限時間内に回答する必要がある。回答者（と視聴者）は、テレビ画面で質問に関連した沢山の画像を見る。ジャパンボウルはこの方法を採用した。「イツアカデミック」番組の興奮する場面は、3つの高校チームが競う番組最後の「早押しクイズ」である。

（「イツアカデミック」は1961年に開始され、現在も放映されているアメリカでの最長記録を誇るテレビのクイズ番組である。）

1992年モーデン先生はワシントンDC日米協会にこの新大会についてのアイデアを持っていき、「ジャパンボウル」と名付け、同協会はこの大会の組織運営を担当することに同意した。

第1回ジャパンボウルは、1993年にバージニア州北部の州立のジョージ・メイソン大学で開催された。約24人の高校生がワシントンDC地区から参加した。白黒ビデオで撮影されたその大会で採用された以下の基本構成はその後にも変わることはなかった。

- 所属高校から選抜された学生チーム同士の競争である。
- クイズボール形式を使用する。（訳注：クイズボールとは、出場者の幅広い学問的知識をチームごとに競う）
- 質問は多岐の分野にわたり、日本語だけにとらわれない。
- 出場学生は他校の学生と日本語を学ぶ熱意を共有する。
- 出場チームの教師は相互に知識や情報を共有する。
- 学生が日本文化を体験する機会を与える。

## ジャパンボウルの発展

第1回ジャパンボウルのビデオには、ワシントン DC 日米協会の元会長であるトーマス・P・シュースミス元大使の、将来ジャパンボウルは全米の学生が参加する全米ジャパンボウル大会となることを希望するという言葉が残されている。

実現までにそれほど時間はかからず、数年のうちに、カリフォルニアからニューヨークまで全米からのチームが毎年ワシントン DC に集まり、2日間にわたり大会が開催されている。

その後、全米ジャパンボウル大会は、ワシントン DC の毎年異なるホテルで開かれた。ホテルは会議室等を備え、学生の食事や宿舎を一つの建物内で提供が可能であったからである。しかしホテルは料金が高く、また学生も「高級」なホテル環境ではリラックスできないという問題があった。日米協会も大会運営に必要なスペース不足に起因する不便を強いられた。

2009年、ジャパンボウルは現在のメリーランド州郊外のチェビー・チェイスにある National 4-H Conference Center に会場を移した。短期大学のキャンパスとして使われていた同施設は、複数の会議室、500席の大講堂、食堂、宿泊施設、事務スペース、屋外スポーツ施設及び広い駐車場がある。学生は快適な環境を享受し、日米協会もまたジャパンボウル運営に必要な施設が利用可能である。

## 米日財団の役割

長年、ジャパンボウルは、国際交流基金、在米日本国大使館そして日本企業等からの資金面の支援を受けている。そのなかで、過去20年以上にわたって最も重要な資金の財源は、ニューヨーク市に本拠地を置く米日財団である。

1980年の同財団の設立以来、米日財団は、同財団の支援の核となる3つの領域の一つとして、大学前教育（K-12）を助成している。若手の米国人と日本人が共通の課題解決に取り組み、お互いの社会、文化、国について学び、更に日本語教授法の開発・改良に関わる教育プロジェクトを支援している。ジャパンボウルはその目標を明確に達成しており、ジャパンボウルは同財団から長年にわたり、他のどのプロジェクトよりも多大な支援を受けている。ジャパンボウルは同財団からの一貫した支援なしには今日の発展はなかった。

## 全米各地におけるジャパンボウル

2011年より国際交流基金日米センターの支援で、日米協会は、より多くの学生の参加を目指して、全米各地でのジャパンボウル大会開催のために複数年にまたがる取り組みを開始した。

今日では、6つの公式のジャパンボウル大会が開催され、全米ジャパンボウル大会と連携して、米国内ーカリフォルニア（ロスアンゼルス）、太平洋岸北西部（ポートランド）、ユタ（プロボ）、イリノイ（シカゴ）、ウィスコンシン（ミルウォーキー）、及びオハイオ（コロンバス）ーのネットワークを構築している。これらの地方大会はすべて1日の大会ではあるが、形式は全米ジャパンボウル大会と同じである。地方大会の多くの優勝者は毎春ワシントンで開催される全米ジャパンボウル大会に参加する。

地方大会は日米協会の地方支部または各州の全米日本語教育学会支部により運営されている。地方大会はすべて大学キャンパス内で開催され、管轄の日本国総領事館と日本企業コミュニティからの支援を引き出している。

2017年には、保護者と教員から構成されるグループがワシントン DC 日米協会の支援により、日本語を学習している小中学生を対象に中部大西洋沿岸地域ジュニアジャパンボウル大会を創設し、その結果、ジャパンボウルプログラムは1年生から12年生までのすべての学年を対象とすることとなった。

## ジャパンボウルの歴代のディレクターたち

過去15年にわたるジャパンボウルは、ジャパンボウルのディレクターとして従事した3人の若い日本人女性ー日野友紀子氏、鶴美穂氏及び神尾りさ氏ーの尽力により発展した。

全米ジャパンボウル大会は、1年間の企画と準備を必要とする手間のかかるプロジェクトである。同大会には300人以上の学生、教師及び保護者が出席する。ボランティアも50人ほどいる。日米協会は前掲の3人の若い女性にこの大規模なプロジェクト運営という困難な業務を任命し、涙ぐましい努力の結果、今日のジャパンボウルの姿に発展した。

全米ジャパンボウル大会運営の担当期間中、この3人はジャパンボウルの拡大にさらなる貢献をした。日野氏はジャパンボウルを堅固な財政基盤に置き、全米ジャパンボウル

大会を全米各地に宣伝した。鶴氏は、研究・調査と財政計画をたて、その結果 2009 年には National 4-H Center に全米ジャパンボウル大会の実施場所を移動させた。神尾氏は、米国内隅々に「発展した」新ジャパンボウル浸透させ、後日世界中に普及させた。そして 10 年というディレクターの任期中に、ジャパンボウルを米国内で日本語を学習している学生の間でトップクラスの学術的な大会として広く認知させた。

## 世界各地におけるジャパンボウル

日米協会は、米国内のジャパンボウル大会の開催都市を増やし、2014 年には世界に目を向けた。神尾氏の再度の尽力により、米国に加えて今日では 12 か国—ブルガリア、カナダ（トロントとバンクーバー）、中国、デンマーク、フランス、イタリア、日本、カザフスタン、メキシコ、ポーランド、セルビア、英国—でジャパンボウルが実施されている。

国際ジャパンボウル大会も全米ジャパンボウル大会の構成に基づいている。日米協会は地方大会の運営団体に登録商標であるジャパンボウルの名称とロゴの使用を認可している。運営団体は、大学、全米日本語教育学会、日加協会や日英協会等の友好団体等である。国際ジャパンボウルは、米国の大会と同様に、日本国大使館、国際交流基金、および日本企業コミュニティーからの支援を受けている。国際ジャパンボウルは、各国事情により高校または大学レベルである。多くの国々では日本語は高校では教えていない。

海外でのジャパンボウルの引き続きの拡大のために、2019 年にはワシントン DC 日米協会は、一般社団法人日本国際教育協会(JGE)という日本の新しい非営利団体と合意書に署名し、同協会は国際ジャパンボウル推進担当団体となった。同協会の名誉会長である佐々江賢一郎氏は前駐米大使であり、ほかの役員もワシントン DC 駐在経験があるビジネスリーダーであり、畢竟ジャパンボウルには精通している。同協会専務理事の神尾りさ氏はジャパンボウルのディレクターとして 10 年の経験がある。

## 未来

ジャパンボウルは、1993 年にワシントン DC で、学生のための小さなコンテストとして出発した。今日では、13 か国で 20 ものジャパンボウルが開催されている。ジーン・モーデン氏が抱いたジャパンボウルのビジョンが非常に魅力的であったからだ。それは、挑戦する甲斐があり、学生にとっては楽しい大会で、語学と文化を融合するものである。また、世界中で日本語教育が継続的に発展しているおかげでもある。（例えば、米国では、現在日本語を学習している学生数は過去最大である。）もちろん、長年にわたり、ジャパンボウルをサポートしてくれる日米協会のような友好団体、各種財団、日本の企業グループ、大学、日本語教育学会及び日本政府からの支援のおかげでもある。

これらの「関係者」は、ジャパンボウルのみならず、日本語教育全体にも関わりがある。将来、日本語を学び、日本という国への強い関心を抱く若い世代が世界中に誕生してくることを有益であると考えているグループがいる。

**著者：**

ジョン・R・マロット元大使は、国務省に31年間外交官として在籍、2006年から2018年までワシントンDC日米協会会長。

国務省外交職員及び非営利団体の役員として、アジアと主に日本を担当。

過去12年間はワシントンDC日米協会会長、8年間は全米桜祭りの役員。

31年間の国務省勤務中、駐大阪・米国総領事、米国大使館では経済担当、国務省日本部長を歴任。2017年、40年にわたる米日関係への貢献により、旭日中綬章を授与。

マロット元大使は、日本語が流暢で、現在は、アメリカの公立学校の日本語教育の支援団体であるJ-LEARNのアドバイザー及び、ジョージワシントン大学にて毎年日本語で開催される「21世紀のためのスピーチコンテスト」であるJ-LIVEのアドバイザー。